様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ２ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０６６５

研究課題名（和文）通訳実務の訓練教材開発の研究

研究課題名（英文）Interpreting training material development using authentic conversations

研究代表者
鶴田　知佳子（TSURUTA, Chikako）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：４０３１６７８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,900,000円、（間接経費）　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：若年通訳者が遭遇しやすい実務状況を反映しつつ、映像・音声を備えた教材を開発した。具体的には6人のアメリカ人との対話及び、イギリスのビジネス背景に造詣が深い専門家の、英語と日本語の対談に基づいた教材を、すぐにでも利用できる形で開発した。背景知識を補うという一点のみ、残念ながら未達成なものの、オーセンティックな対話を利用することは通常、商業的なコンフィデンシャリティの問題から非常に困難とされてきた。この点でも意義のある試みと言える。

研究成果の概要（英文）：One formal conversation between Japanese U.K. specialists and 6 dialogues between American informants and the author were collected in the project. The study used them as authentic material to develop an interpreting training material. Due to confidentiality of respective commercial enterprises, use of such an authentic conversation was virtually impossible. The project succeeded in developing a prototype of interpreting material, which is of practical use for interpreting trainees and young, comparatively in-experienced interpreters.

研究分野：人文社会系

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：通訳　翻訳　通翻訳　通訳翻訳学　教材開発

１．研究開始当初の背景

日本では大学・大学院で通訳を学んだ後、フリーランス通訳者として活動を目指す場合、社内通訳者として経験を積むのが最近の傾向となっている。その際に、通訳者は外国人幹部のために日本語で発話された会議の内容を、簡易同時通訳装置を用いてウィスパリング同時通訳ないし逐次通訳を行う。またその逆に外国人幹部が英語で発言した内容を会議に参加する日本人母語話者にウィスパリング同時通訳ないし逐次通訳を行っている。従来この２つは我が国の大学・大学院においては、英日方向の同時通訳もしくは逐次通訳、日英方向の同時通訳もしくは逐次通訳の授業として、別々の科目とされてきた。学部・大学院を出てすぐに通訳実務に就きたいと願う学生にとっては、現場に即した形で、英日方向と日英方向の両方を融合した教材を用いて訓練を行うことが必要となる。通訳者のための実務の裏付けとなる、政治経済、国際関係、情報技術といった社会科学などの背景知識を豊富に盛り込んだ、通訳者が働く現場に対応できる教材の開発と授業の運営が必要となる。

通訳者は通常の場合、自分が特定の業界の専門家としてではなく、コミュニケーションの専門家として参画するのであるが、その場におけるコミュニケーションを円滑に成立させるのが通訳行為の最大の目的であるため、職務を果たす上では、固有名詞を含む個々の業界の常識をあらかじめ身につける必要があり、通訳業務におもむく前に事前リサーチを行うことが欠かせない。リサーチ方法及び背景知識の重要性についても、本教材を使用する上で包括的に学ぶことを可能とするよう配慮する

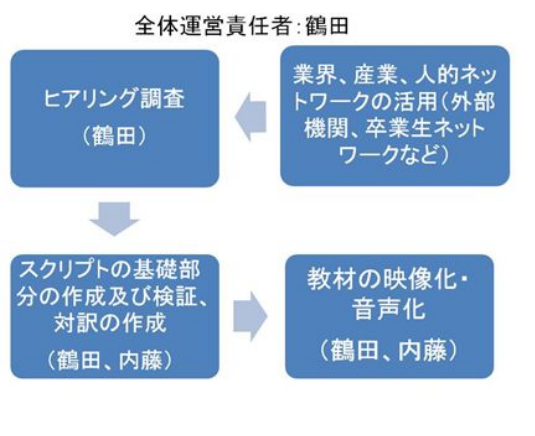
２．研究の目的

対話型の教材を実務現場に即した背景知識を盛り込む形で、映像および音声を最大限活かして開発する。具体的には社内通訳者が活動する現場である研修通訳や随行通訳、及び簡単なビジネス・ミーティングでの通訳場面を想定し、必要とされる背景知識も適宜盛り込みながら双方向の対話型教材を開発する。

研究期間内には、現場でのヒアリングに基づいて、外部機関との人的ネットワークを活用し、現状ではいまだ提供することができないでいる、さらに実務に即した通訳教材の開発を始める。それに伴い、これまでに培ったノウハウを最大限に活かし、通訳スクリプトをおこし、トップダウンではなく、ボトムアップの方法で積み上げていく対話型の日本語・英語双方向の言語での発言を再現する。その際に、あくまでも現場に即したものとなるような工夫を図る。

３．研究の方法

外　部機関との人的ネットワークも活用しながら、通訳実務に即した場面のヒアリングを行う。その上で、あらためて経験年数の浅い学部・大学院を終えた直後の学生が就業すると考えられる通訳場面について現場調査を行う。調査後、ヒアリングにもとづいて得られた知見を集約し、テーマ別の対話型教材のスクリプトの基礎部分を作成し、検証にあたる。改善すべき点を抽出し、スクリプトをさらに精緻化した上で、対訳を作成する。その上で、映像及び音声を盛り込んだ具体的教材を作成する。作成にあたっては、想定されている業界特有の言い回しや表現、専門用語などを網羅する背景知識を学生が習得することも視野に入れる。市場の要請を十分にくみ取り、背景知識も豊富に盛り込んだ形での、トップダウンではなくボトムアップの積み上げ方式のアプローチを図ることにより、通訳実務に即役立つ教材開発を目指した。



４．研究成果

若年通訳者が遭遇しやすい実務状況を反映しつつ、映像・音声を備えた教材を開発した。具体的には６人のアメリカ人と研究代表者の対話及び、イギリスのビジネス背景に造詣が深い専門家の、英語と日本語の対談に基づいた教材を、すぐにでも利用できる形で開発した。アメリカ人との対談は、２年次に行った海外調査と同時に収集したもので、日米協会に携わることで日本とアメリカ２つの文かに触れる機会のあった人材との会話である。ビジネス関連の専門家の対談は調査に基づいて開発した、オーセンティックなビジネス会話である。

実際に作成した教材は大きく二つに分けられる。一つは、アメリカにおいてオーセンティックな素材として収集した素材である。スクリプト化された音声素材と映像素材の二種類がある。もう一つは、異文化間コミュニケーションの知見としても役立つイギリスにおける日本人ビジネスマンの立場からの、日本人とイギリス人とのあいだにおける

交渉場面を想定した音声とスクリプトの教材である。

スクリプト化された音声素材としては、アメリカのさまざまな立場の人たちへの対話型インタビュー素材が6種類あげられる。
第一に舞台ディレクターおよびスピーチコミュニケーションの教授としても活躍している、バートン・ウルフ氏へのインタビューである。ここで語られている内容は、UNICEF のイベントディレクターの経験がある同氏が、中国とアメリカ両方においてプロデュースしたミュージカルにまつわる経験談と、多文化社会において共同プロジェクトを行っていくうえでの心構えである。

第二に、日系実業家としてテキサス州で手広く日本食事業を展開している、グレン・ゴンドー氏へのインタビューであるが、ここでは「スシ」という日本食がいかに地元のアメリカ人に親しまれる食品に育っていったかの体験談が語られている。地元のスーパーマーケットで広く受け入れられるようになった背景には、健康志向であること、アメリカの現地の食材を活かすかたちで「現地化」された独自のメニューの開発などがあげられる。テキサス州において日本食ビジネスで成功している同氏は、日本から移民としてアメリカにやってきてカリフォルニア州で苦難を乗り越えて成功した両親を誇らしく思い、今後も日系人として日本の多くの食文化をアメリカにおいてさらに広げていきたいと抱負を語っている。

第三に、ヒューストンの日米協会会長も勤めた経験のある大手銀行の経営幹部であるグレッグ・クロウ氏へのインタビューである。もともと、日本文化に強い関心があった同氏の日本に対する関心は文学に始まったこと、その後学生時代に日本との文化交流事業に参加したことで、日系の銀行に勤務することからビジネスマンの生活が始まったこと、その後も日米の実業界への貢献のみならず、文化面の交流を側面から支える活動に参加していることが語られる。

第四に、全米の米の半分を算出するアーカンソー州出身のビジネスマン、ジョー・ヘフナー氏へのインタビューである。アーカンソー州からテキサス州に移り、中南米駐在経験もある同氏が、資源に恵まれていることから全米の中でももっとも活況を呈している経済圏のひとつであるテキサス州の経済、今後の展望などについて語っている。

第五に、ヒューストンで長年、テレビのニュース番組のキャスターを務め現在はラジオのニュースを伝えているシャラ・フライヤー女史に対してのインタビューである。もともと、高校生のときに日本に交換留学経験があって親日家のフライヤー女史であるが、報道現場にたずさわっている立場からニュースの視点について、報道のありかたについて語っている。特に現地に即した報道をするという観点から、ヒューストン地域で最近急速に存在感を増しているアジア系の移民に対して、どのように人種多様性を抱合した報道が行えるかについても言及している。

第六に、インド系の移民であり JET プログラムという国際交流員として日本で英語を教える ALT としての勤務経験があるシュリー・クルレカー女史へのインタビューである。インタビュー当時、クルレカー女史はヒューストン日米協会の事務局長を務めていた。その立場から、日本において英語を教える際に必要なこと、アメリカにおいて日本文化の理解を促進するうえにおいて必要なことの二つについて語っている。言語をおしえるということ、文化を学ぶということについての示唆に富む発言となっている。

アメリカで取得した映像取材としては、音声素材で第一に登場するバートン・ウルフ氏がヒューストン・コミュニティ・カレッジ（HCC）のスピーチ担当教員として、地元ケーブルテレビ局で放送されている HCC のスタジオにおいて録音されている United We Stand という番組に、鶴田がゲスト出演したものである。内容については、日米の教育の比較というテーマでそれぞれの立場からの所見が語られている。

イギリス英語を用いた素材としては、スクリプトと映像の素材である柴田真一氏（日本語スピーカー）と安高純一氏（英語スピーカー）の対談を作成した。両者ともにイギリスで 20 年前後のビジネス経験があるなかで、日本語で話しかけたことに対して、通訳者がいることを想定して英語で応えるという形式の対話型素材としている。あらかじめ、大きくわけて三つの場面を想定して、それぞれ20分程度の長さの教材を作成した。まず、第一の場面としては「グローバルに活躍するに際しての必要な条件」である。ここでは、日本企業の海外での活動について仕事の進め方の違いとしてどのようなことがありえるのか、問題を乗り越えていくために何が必要とされるのかが語られる。

第二の場面としては、従業員の仕事に対する姿勢が語られる。仕事のうえで何を重要な要素として考えるのかについては文化的な考え方の違いによるどのように責任をとるのかについての見解の相違がみられるが、それはどのようにコミュニケーションをとることで乗り越えられるのか、チームワークとして問われるのは何か、が語られる。

第三の場面としては、働く場所としての日

本企業のありかたについての議論である。日本企業が世界に伍してグローバルに展開していくためには、いわゆるグローバル人材とよばれる人たちをひきつけられるような魅力的な場所でなくてはならないが、そのためには何が必要かを話し合っている。

このように、イギリス英語を用いた素材は、文化的な考慮点も含めた、実際に通訳者があいだに介在したという想定をしたうえでの対話型教材となっている。

アメリカで収録した素材、イギリス英語を中心とした素材ともに、通訳を行う対象の素材としてだけではなく、その教材を使うことによって多文化社会やグローバル人材として活動することに対する理解を促進することも意図されている。これも本「通訳実務の訓練教材開発の研究関連教材」においてあがった成果の一つである。スクリプトのかたちで即、使用が可能なように冊子のかたちとしてもまとめ、音声も利用可能なように準備がされている。

教材開発コンセプトとしては、通訳者の職務の最大の意義である「その場におけるコミュニケーション」を成立させている、実感を得られるような臨場感のある教材開発であった。実際の通訳現場では、通訳行為は話し手に対する反応を聴き手が示し、その内容を通訳者が伝えたうえでさらに話し手が発展させていく、議論の進展を助けるものとして進行していくが、ややもすると教材では一方向のコミュニケーションのものが多かった。今回、その点を補う教材開発を意図した。

背景知識を補うという一点のみ、残念ながら未達成なものの、オーセンティックな対話を利用することは通常、商業的なコンフィデンシャリティの問題から非常に困難とされてきた。この点でも意義のある試みと言える。また、映像・音声を備えているため、単純な通訳技術習得のためのみにとどまらず、いわゆる「慣れ」、視覚・聴覚的に場面に触れることで、経験面を補うことができる。これもまた、即教育目的で役立てることが可能といえるであろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計６ 件）

①鶴田知佳子、学部通訳教育一環としての、時事英語の授業、東京外国語大学論集、査読無、87 巻、2013、pp.197-214

②鶴田知佳子、通訳者養成における時事英語の位置づけ、東京外国語大学論集、査読無、85 巻、2013、pp.369-403

③内藤稔、「相談通訳」におけるコミュニティ通訳の専門性、シリーズ多言語・多文化協働実践研究、査読無、16 巻、2013、pp.31-56

④Chikako TSURUTA、Using Sight Translation in Simultaneous Interpreting Class、Interpretation and Translation、査読有、14 巻、2012、pp.165-191

⑤ Chikako TSURUTA、Conference Interpreting Program at Tokyo University of Foreign Studies、Conference Interpretation and Translation、査読有、13 巻、2011、pp.195-209

⑥ Chikako TSURUTA、Minoru NAITO、Incorporating practicums into the conference interpreting program、FORUM、査読有、9 巻、2011、pp.103-117

〔学会発表〕（計４件）

① 鶴田知佳子、学部における時事英語、日本通訳翻訳学会第 14 回年次大会、神田外語大学、2013 年 9 月

② Chikako TSURUTA、Minoru NAITO、Interpreting Education at Undergraduate, Graduate Level --Future Prospects--、Third Asian Interpreting Symposium、香港理工大学、2013 年 3 月

③ 鶴田知佳子、時事英語の授業運営、日本通訳翻訳学会第 13 回年次大会、京都橘大学、2012 年 9 月

④ Chikako TSURUTA、Using Sight Translation in Simultaneous Interpreting Class、Second Asian Interpreting Symposium、国立台湾師範大学、2012 年 3 月

〔図書〕（計１件）

① 鶴田知佳子、柴田真一、コスモピア、英米リーダーの英語、2013、190

〔その他〕

ホームページ等

http://tufs-interpreter.org/research.html

６．研究組織

(1)研究代表者

鶴田　知佳子（TSURUTA, Chikako）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号：40316782

(2)研究分担者

内藤　稔　　(NAITO, Minoru)
東京外国語大学・世界言語社会教育センター・講師
研究者番号： 90507211